全体討論

丸山：そろそろ全体討論を始めたいと思いますが、その前に、「龍谷の森」里山保全の会の上田さんから直接ご要望をいただきまして、ホールに用意されたアカメガシワのお茶の作り方を説明せよ、とのことです。簡単に説明しますと、まず、アカメガシワの葉っぱと茎を取って来たものをそのまま乾燥させます。しっかり乾燥させたあと、葉っぱと、茎も使っていいんですが、一番簡単なのは、紅茶を出すガラス製の容器がありますね、ああいうものの中に入れて、沸騰させた熱湯を注ぎ、3分から5分間ぐらい待ちますと、いい色になってきます。茶色い色に。それを飲めばいいわけです。最近、アカメガシワは一般的によく使われるようになっているみたいですが、われわれの所では、アカメガシワのお茶を試して教えてくれたのは理工学部の江南和幸先生です。江南先生は本日は、ちょっと所用があって外国に行っておられますが、私の家ではそのほんのりするアカメガシワのお茶のことを「エナミ茶」と呼んでいます。

それでは、約40分間ぐらい残された時間がありますので、さっそくディスカッションに入りたいと思います。　質問票が大変たくさん来ておりまして、中には内容的によく分からないものもありますので、こちらから改めてお名前をあげまして、直接言っていただく場合もあります。また、最初にパネリストの方々の間で質疑応答をしていただくことも考えましたが、時間が十分にはありませんので、さっそく質問票を取り上げまして、その中でまたパネリスト間のディスカッションがあれば、と思います。残念ながらすべての質問票を取り上げることは時間的にみて不可能ですので、よろしければ後ほどのパーティーの席、もしくはお手紙等でお答えしたいと思います。

最初にいくつか松田さんに質問が来ておりますので、少し読み上げさせていただきたいと思います。最初からわれわれの仲間内で恐縮ですが、里山ORC研究スタッフで滋賀県立大学の野間さんから松田さんに、「1軒の持ち山は1、2町歩とのことでしたが、1年分の燃料は自給できたのでしょうか」、という質問です。それから、飯田さんという方からやはり松田さんに、「村人は全員山を持っていたのか。そして山を持っていない人は燃

料をどうやって確保したのか」という趣旨のお尋ねです。

松田さんには、主に明治の頃からご自分の子ども時代までの話をしていただきましたので、そういう時代のことでのご質問だと思いますが、いかがでしょうか。

松田：まず最初に、1年分の燃料がどのぐらいいったんかということでございますが、私の報告の時にも申し上げましたように、稲ワラ、麦ワラ、菜種ワラと、田んぼで収穫できるワラがございますんで、僕の感じで、我が家ではですね、それで燃料の3分の2を賄っていたと思います。残る3分の1が焚き木じゃなかったんだろうかと思います。これは各家によって、持ち田、持ち山、それぞれ違いますんでですね、不足分は何かで補っていただろうと思います。それが一点。

もう一つ、山をみんな持っていたんだろうか、というご質問ですが、明治以降、村山となってですね、大萱の在所では約500から600軒の世帯がございまして、そのうちで約1割程度しか山を持てないはずなんです。と申しますのは、大萱で山林がトータル致しますと80町歩ございまして、それに対して約50軒の持ち山主がいましたから、10%の人が持っていました。その10%の人に対して、それの分家だとか、嫁さんとか縁のある人が、その山によって、焚き木取りをしておりますから、この村山で燃料を補給できた方は世帯の3分の1ぐらいだろうと思います。残る3分の2はどうしたかと言いますと、南郷から千町、〔瀬田川の〕向こうの山へ行って、いわゆる山を買いに行って、そこで柴刈りをして、持ち帰って、自家消費に当てたということでございますんで、在所の内半分から3分の2近い人は瀬田山だけじゃないんじゃなかろうかと思います。

丸山：松田さんにもう少し質問票が来ています。松田さんは、子ども時代の思い出を中心に話していただきましたが、「茅場はありましたか」、それから「屋根ふき材はどこから調達したのですか」という質問が来ています。何か思い出されることあるでしょうか。

松田：えーと、茅場ですか。まとめて茅場というのはなかったように思うんですけども、ワラ葺きの屋根というのは主に小麦ワラを使っておりまして、大麦、ビール麦ではちょっと柔らかすぎて駄目なんです。小麦の硬いワラで屋根を葺きました。それは自分の所の納屋だとか「つし」ですね、「つし」と言っておりますが、屋根裏の狭い所をですね、それがワラの保管場所になっておりました。屋根葺きは数年に1回必要ですので、毎年保管致しまして、屋根葺きをやったと思います。

丸山：どうもありがとうございました。次に田中三郎さんにいくつか質問が来ていまし

て、ちょっと専門的な話かもしれませんが、「明治8年に官山払い下げがあったとのことですが、反あたりいくらぐらいだったのか」、という質問です。

松田：僕のスライドの画面がございませんと、僕暗記してませんので、ちょっと答えられないので申し訳ありませんが。〔スライドの用意〕・・・・単筆締めて一町八反が十三円、二町弱で十三円ですね。

丸山：一町八反で「十三円八十一銭五厘」という値段だそうですが、現代のお金にしていくらぐらいですかね。

松田：一反が一円以下っていうことですね。一町八反で十三円ですから、おりかえしますと十八反で十三円ってことですから、一反あたり一円してなかったってことになりますね。

丸山：一反一円弱だということですが。

質問者：当時の米一俵の値段がわかれば、だいたい一般的な値段の検討がつくのではありませんか。

丸山：そうですね。この時の米一俵あたりの値段がいくらぐらいだったのでしょうか。

松田：これを調べたものが手元にはあるんですけども、今日は用意してまいりませんでしたので申し訳ありません。お答えできませんので申し訳ありません。

丸山：もう一つ、田中三郎さんと松田庄司さんに。いずれでも結構だと思うんですけど、「子ども時代にどのような遊びを、どんな所でご自身がされたのか、何か特別思い出がおありになるようでしたら聞かせて下さい」、という質問です。滋賀大の3回生の千葉さんという学生さんから質問をいただきました。

田中：私は地元出身ではございませんで、新潟県中魚沼郡という所の出身です。子どもの頃は積雪量5mを越す、そういう所ですので、裏山へ上がりますとスキーに乗って玄関まで入れるという、そういう所で生まれてますので、まあ子供の時分はスキーで遊んだという、そういうことです。ですから、多分いまの質問はこの地方での子どもの時代についての質問だと思いますので、松田さんにバトンタッチさせていただきます。

松田：さあもう70年前の話になるんで・・・・、おそらく勉強しとって真面目な子だったろうと思うんですけど、・・まあ確かに屋外に出て凧揚げしたり、野山を駆けずり回ったり、集団で行動しとったことは確かなんです。で、今みたいに道具を使って、例えばサッカーをするとか、野球するとか、何をするという、そういうことは全然なしにで

すね、野山を駆け巡る、山でターザンごっこ、今で言うターザンごっこですね、あーいうことをやっておったという記憶しかございません。申し訳ないですけども。

丸山：遊びについてはさっき古市さんの方から少々お聞きしていたのですが、古市さんの思い出としては、瀬田山よりはむしろ田上山の方になるわけですが、これは真光寺住職の東郷さんからも同じようなこと聞いていました。山滑りですね、はげ山を滑り降りるというような、かなり危険でありかつ「相当悪いこと」をしていた、ということを東郷さんが言っておられましたが、古市さん、ご自分はどうだったのすか。

古市：あの、まあ、われわれは特に上田上牧と言う所ですと、後ろも前も山というように、山がたくさんある所でして、今、丸山先生がおっしゃったようにですね、子どもらが田んぼ行けば手伝わされますから、山とか、できるだけ家から離れて遊ぶということが多かったですね。先ほど柴原さんの方からお話しがあったように、とくに村山と言いますか、その後ろの山の方はいま新名神ができてきてますが、そこにはたくさんため池がありましたんで、そこで夏場はよく泳ぎました。いまのプールの代わりでした。大戸川でも泳ぎましたが、あの村のため池で泳ぎました。ため池と言いましても非常にきれいな池でして、上の方はあったかいんですが、ちょっと下の方は冷たくて冷たくて、そういうな所で、みんな泳いでました。名前は「掛け算池」とか「割り算池」とかいうような名前の池が、今はもう「割り算池」はなくなりましたけれども、そういうような所で遊んでおりました。

丸山：どうもありがとうございました。田中三郎さんにもう一つ質問がきてるんですけど、私ちょっと読み辛くて、直接質問していただけないかと思うのですが、中野さん、おられるでしょうか。

「広く田上学区の歴史、瀬田、上田上、田上との」、これ何でしょうね、「源内道路」って読むんですか。源内峠の所のことを源内道路と言ったんでしょうか。読みにくいんで。中野さん、おられますか。

中野：源内道路がですね、昔田上と瀬田の主要な道路であったということで、質問を書かせてもらいました。上田上学区の歴史は源内道路なくして語れないというのが現状だろうと思いますので、特にそうした歴史的な所を紐解いていただくんだったら、源内道路を一つですね、中心に上田上学区の方へ紐解いていただいたら身近に感じられるんではないだろうかなという気持ちで、質問させていただきました。

丸山：どうもありがとうございました。ちょっと確認なんですけど、源内峠の所の通りを源内道路と呼んでたんでしょうか。

中野：ただ道路という表現を使わせてもらっただけです、名称としては、源内峠でいいんです。

丸山：源内峠については田上側の資料にもいろいろ出てきますし、確かにこの瀬田と田上との最も主要な交流道路であったようですけども、田中三郎さん、いかがでしょうか。

田中：ただ今の質問の方は、田上サイドからの質問のようですが、大萱側からの文書を見ますと、源内道路って言葉はつい見かけませんでした。田上道。田上への入り口はですね、すべからく田上道、まあこの一本で古文書は記載されています。道路という言い方は古い時代では使われていないと思いますので、例えば広い道は往還とか、街道とかですね、そういうふうな使い方ですので、道路という言葉があったとしたらまあ、近代になって、皆さん方が源内峠があるから源内道路とおっしゃったかもしれませんが。

〔会場から質問者の声〕

丸山：ちょっと待って下さい。今マイクがいきますので。はい、どうぞ。

質問者：あの、滋賀医大の病院の所からずっと芝原の方へ抜ける山の中へ通る道がありますね。あの道は何という道ですか、そうすると。何か道の名前がついてますか、あれは。

丸山：車で今でも通れる道ですね。

質問者：ええ、車でも通れます。

丸山：あれは源内峠とは関係ないですね。

質問者：あれは昔からあるんですか、あの道は。

田中：昔からあるんです。実はですね、月輪、それから大萱ですね、新浜ですね。その文書から探りますとですね、例えば新浜村にはですね、大萱を通りまして、新田、月輪へ行きまして、そして上へあがりますと今の医大のそこへ抜けてくるわけで、そしてその道の大萱の所に、やっぱり田上道と書いてあります。したがいまして、新浜もしくは月輪、そういった所から田上サイドへ抜ける道すじという風に解釈できるんじゃないかと思うんです。

〔しばらく瀬田と田上を結ぶ道をめぐる質疑応答が続く。〕

丸山：かなりマニアックな話になってきました・・・・。えっと、ほかにいくつか質問

がきています。これはお名前がないのでちょっと困っていますが、柴原さんに答えていただけたらと思います。「お米の品種が早生中心になり、農事暦が昔とはずれているのではないでしょうか。それによる稲作生態系の中での生き物の生活史とのずれも生じているのではないでしょうか」という趣旨のご質問なんですけれど、いかがでしょうか。

柴原：そうですね。先程お話ししましたように、昔は、稲とそれから、麦・菜種の二毛作でしたので、麦とか菜種の収穫は6月に入りますから、それが終ってちょうど梅雨時になって水が豊富になってから初めて稲作を始めました、稲作の作業に入ったわけです。そして、それは、栽培の作型で言いますと「普通植え」になります。今、ゴールデンウイークに植えているのは「早植え」ということになります。現在の早生品種ですと、9月上旬から10月に収穫になりますが、以前の普通植えの場合ですと、11月になっても収穫していたように思います。私事になりますが、私は11月上旬が誕生日でして、私の母は、ちょうどその日に稲刈りをして、そのあとすぐに産気づいて、私を産んだ、と聞いていますので、昔はやっぱり11月頃までだったんじゃないかなあ、と思います。

この辺りではどちらかというと筵（むしろ）で2、3日かけてお米を乾燥させて調製していったということで、湖北のように稲架掛け（はさがけ）するようなことはなかったというように聞いています。そういったことが当時の稲作の暦的なことだったんじゃないかと思います。ですから、現在は比較的早くから水を張っているということがありますし、水をきるのも早く終わっているわけです。その早い遅いがどう影響しているのかということは、また生態学者の方と調査してみると面白いのかなあという気はしています。ただ、ちょっと触れましたけれども、甲殻類、エビ類ですね、5ミリから1センチぐらいの非常に小さな貝エビ、二枚貝のような甲羅を持ってるエビ、それから豊年エビ、ちょっと細長いものですね、それからかぶとエビになってきますと2センチぐらいになってきますけれども、そういったものは今でもきちっと既成田の所、圃場整備していない所を調べてみた限りでは、非常にたくさんおりましたし、琵琶湖博物館の調査でもそれは証明されていますので、そういった意味では、ある程度の生態系はそれなりに維持はされているというようには思っております。

丸山：よろしいでしょうか。先ほど松田さんにお答えしていただいたことと少しつながる、類似した質問ですが、「1年間に使う薪、柴、稲ワラ、麦ワラ、落ち葉等はどのくらいの量に上ったのでしょうか。この点について南大萱とそれから田上とについてそれぞ

れ教えて下さい」、という質問が、また里山ORC研究スタッフ仲間である、須藤さんからきています。まず、古市さんどうでしょうか。

古市：田上の方ではですね、南大萱で使用されたという稲ワラや麦ワラというのは、まず燃料としては使わなかったと思います。ほとんど山の材を使って1年しのいでいたと思います。ただ、どれくらいの量かと言われますと、それぞれ、例えば、釜戸の数にもよりますし、お風呂にしても、例えば毎日沸かす所もありますが、昔ですと本当に二日に1回とか三日に1回とかいうふうな所もありました。私の家は川のすぐ側ですので、毎日のように風呂を炊いておりましたが、近所からもらい風呂と言いまして、よくおばあさんとか来られたということもありました。それによって、まあ何束とか、ちょっと私も単位が分かりませんので、どれぐらい使用してきたっていうことは分かりませんが、冬場は、私の家では父親とか私も含めてですね、冬仕事として、割木作りをほとんど毎日のようにしておりました。ちょっと答えになってないかも分かりませんけども。

丸山：松田さんはいかがですか。

松田：これ、単位というのが非常に難しくてですね、どう表現したらいいんでしょうなあ。うーん。もしどなたか、こういう表現の仕方あるよと、一日に使うのはワラが何束だ、割木が何本だというようなことを言えば、あと365でいけるわけですね。ちょっと表現難しい。

古市：失礼します。まあそういう意味で言えばですね、私の家では風呂はまだ薪で炊いているんすが、夏と冬と違いますけども夏でしたら、そうですね、これくらいの直径のものがですね、もう3本か4本あれば風呂は沸きますし、冬であればそれの倍以上、10本くらいかかります。そんな単位で推し量っていただければありがたいと思っております。

丸山：須藤さん、直接ちょっと、お尋ねになって下さい。

須藤：どうも申し訳ありません、変な質問しまして。私がずっと通っていた会津ではですね、春木切りというふうに言って、やっぱり1月から雪が硬くなるまでですね、3月ぐらいまで薪取りやるんですね。それは単位がですね、高さが6尺、幅が3尺、長さが6尺、これが1棚という、棚で勘定して、それが5棚あれば冬の間も焚き木は賄えるんだということを教えてもらってたものですから、例えば大萱とか、あるいは田上で、そういう単位が、おおざっぱだと思いますけど、まあ一棚とか一入れ、これだけあれば越せるとい

うようなことをちょっとお伺いしたかったんです。難しければ、大体の感触が分かりましたので、もう結構です。

松田：今ヒントを与えて頂きましたのでよく分かりました。割木に換算しましてですね、幅にしますと5m、高さが1m20ぐらいですか、それくらいの分量の割木を作りまして、それだけの分量は年間で消費しました。それで、有り使いですから、無くなれば、もう後はワラということになると思います。

田中：すいません、割り込みますが、雪国から来たものがこの村〔南大萱〕へ入りまして、その焚き木燃料のですね、使い方の違いにびっくりしました。須藤先生からの質問がありましたようにですね、私の故郷は雪国ですから、春、雪が消えますと、山へ入って木を切る訳です。冬、木を切ることはできません。雪の下ですから。そのためにその春木を切るということで山に入るので、春木山というように私の所では言います。そして、それを積んでおきましてですね、秋、その山から引き上げて、これを燃料に使うという、そういうサイクルをしています。このあたりですと、ワラを燃やすんですけども、雪国ではワラを燃やすことはありません。ワラは大体堆肥にします。あるいは牛の糞に混ぜて堆肥にする。このへんはすぐワラを燃やすので、びっくりしました。

丸山：えー、どうでしょうか。だんだん話が面白くなってきました。会場から何かご質問があるようですが、、、。

土屋：あの、土屋ですが、柴原さんのお父さんから伺ったんですが、やっぱり薪をですね、割木にしたときの、単位ですね、ちょっと今思い出せませんが、ある単位があって、会津とはまた違った名前でしたが、やはりある単位があるようでした。だから、消えかかった記憶として、何か単位があるんだと思います（柴原講演の注釈参照。p.74）。

丸山：他にもいろんな質問がきています。ちょっと面白い質問といえば面白い質問なんですが、田中三郎さんには、「古文書の中の村山」というお話をしていただいたわけですが、この古文書に見る限り、昔の「腹疫」というのですか、お腹の疫病ですね、どのようなものがあり、それが現在から見てどのような伝染病だったと推測されますか、という趣旨のご質問です。

田中：われわれの年代の方はみなさん体験済みだと思うのですが、赤痢、それに疫痢、大萱文書を見ますとですね、天然痘あるいはコレラ。まあ伝染病はすべからく流行った。流行り方はですね、人がうつすわけですから、「通行これをうつす」ということで、コレ

ラですと、外国から入ってきます。長崎にはいろんなことがありますから、それから歩いて渡ってきますので、西から順番に流行ってくるわけです。そして大津に流行りますと、瀬田へ入るではなくて、矢橋へ先渡って、矢橋が先病気になるという記録が残っています。それは何故かといいますと、大津から船で渡った方が早いわけですね、旅行する人が。それで、矢橋の港にあがるために、矢橋に流行って、その後で大萱に流行る、そういうふうでした。

それで江戸時代はですね、まあみなさんご存知の大飢饉と言いますと、享保、天明、天保の飢饉、これが日本の三大飢饉ですけども、飢饉になるのはですね、日本史では不作の年を日本の飢饉の年としている、米が取れなかった年ですね。ところが、実際餓死が出たり、病人が出るのは翌年なんです。というのはどういうことかと言いますと、不作の年は前年のもので食べてますから、まだ食べ物があるわけです。で、不作になりますと翌年の食べ物がありませんから、ちょっと傷んだものを食べる、ちょっとややこしいものを口にするということで、病が流行りだします。そういったことで、江戸期は「三大飢饉」と言いますけども、大体150回飢饉があったと言われています。ですから徳川幕府260年の歴史の中で150回を引くと、毎年のように飢饉があったということは、毎年米不足だったということです。流行り病が流行っても、薬がありません。したがいまして、徳川幕府がですね、飢饉の時に流行り病が流行るということが分かって、老中の名前で、その薬の処方を全国の藩に配布する書付があるんです。膳所藩にもあるんですが、享保17年の享保の大飢饉の時に配布した書付が、薬の処方ですが、それが100年後の天保の大飢饉の時にも、やっぱり同じものを配布しております。ということは、その間100年間、享保から天保の飢饉までの100年間、医学の進歩はゼロだということが分かるんです。まあそういうことで、医学がありませんから流行り出したらとことん流行るということで、大萱の人口が1000人くらいの時にですね、100人ぐらい死ぬ年があるんです。ですからなかなか人口が増えなかった、ということです。

丸山：どうもありがとうございました。これは質問票に書かれていることで、内容的には質問ではないのですが、山本さんという方から、「持ち山の木がたくさん倒れています。悲しいことです。子供の頃の緑濃い山に戻したいと願っています。何かお手伝いをすることがあれば教えていただきたいと思います。田上の里に住み、車ですぐです。」というコメントをいただいております。

微力ではありますけれども、龍谷大学で運営しています私たちの里山ORCも、緑を維持するということも含めて里山の維持をしたいと思っております。それから、龍谷大学の教員と学生と、市民の方々が連携するグループとして「龍谷の森」里山保全の会というのをだいぶ前からやっております。まだNPO法人登録はしていませんが、現在130名の方の会員で運営しておりまして、私が事務局世話人です。廊下の所に入会案内書をおいてありますので、もしよろしければ入会していただきたいと思います。

もうあまり時間がなくなりましたので、これはパネリストの皆さんにお答えいただけたらと思うのですけれど、大津市役所の大西さんから、「龍谷大学が『龍谷の森』を大学実習林として保全活用を決断されたことに敬意を表するものです。本日は瀬田山が瀬田地区と上田上地域住民の暮らしに重要な役割を果たし、維持されてきたことを学びましたが、里山の所有者が変わり、生活との関わりも薄れた今日、地域住民として、現在里山はどういう役割を満たしていると思われますか。また、今後どういう目的であれば地域住民として瀬田山との関わりに少しのお金を出したり、汗を流したりすることができると思われますか」という質問なんですけども、よろしかったら柴原さんから順番に、何かご意見いただければと思います。

柴原：最後の方で私なりに里山保全のあり方というところで少しお話しさせていただきましたけれども、NPOなど多様な団体の方々、そして今日お話しいただいたような年配の方々、それから若者、それともう一つは、これからは団塊の世代の方々が体力的にも教養的にも非常にこうポテンシャルがある年代の方々ですので、そういった方々の力を借りてどうやって連携を深めていくかということが重要になってくるように、私は思っております。それと、時間の関係でゆっくりと説明しなかったんですが、現在、お茶碗一杯のご飯、お米がですね、たった20円という価値しかございません。これは市場経済の中での話ですけども、それを作ることによって、お話しましたような生物多様性等も含めたいろんな価値が生み出されていると思います。そういった多様な価値を、いかに里山学・地域共生学の中で明らかにして、提案していけるか。私はそれは非常に重要な学問的なテーマだと思っております。是非この中でいろんな生き物調査をしていただいて、それを何らかの形で価値としてアウトップットしてみる。それに対して所有者だけでできないものは、その地域の方々との連携の中で取り組んでいく。幸い滋賀県はですね、環境こだわり農業ということで、通常のお米の値段以外に環境保全に寄与する積極

的な取り組みに対して税金をもって支援するということをやっています。これはまさに外部経済の話になっておりますし、そのあと滋賀県では琵琶湖森林づくり条例を作って、これも県民税をいただいた形で、森づくりに関わっていただく方々にまた助成をしていくという仕組みを県でも用意しておりますので、現に「龍谷の森」の方々も事業を活用していただいていると思いますけれども、そういった輪を広げていって、消費者だけでなく、地域全体で山を守っていく、これこそまさに地域共生ということになりますので、期待しています。

丸山：どうもありがとうございます。それでは古市さん簡単にお願い致します。

古市：そうですね、いま柴原さん、おっしゃっていただいたんですが、山と里と里に流れている川というのは密接に繋がっていると思うんですね。ちょっと答えになるか分からないですけども、以前、大戸川というのは非常にきれいな川で、鮎なんかもたくさん上がっておりました。ここ最近、もちろんいろんなこともあったんでしょうけども、上がってきているのも少ないですし、また鮎漁も不作になっています。やはり山をきれいにすれば、もちろん田んぼも田んぼの水も、田んぼに入れる水もきれいになりますし、川の水もきれいになります。密接に何か繋がってるっていうのは、実感しています。それを今後、山に関してどういうように生かしていくかっていうことは、いろいろ市民の方々含めて、議論にはなると思います。

丸山：どうもありがとうございました。松田さんもちょっとお願い致します。

松田：環境の問題にまで影響を及ぼしてきたということはですね、実際正直に申し上げますと、日常生活において山も関係なくなってきたからだと思います。われわれ日常生活するのにワンタッチで全部都市ガスは出るわ、お湯は出るわ、水は出るわということですから、山がなくても平気で、それが山から供給されているということを忘れてしまって、日常的に楽なワンタッチで生きていると思います。じゃあ、その人たちをどうして元の姿に思いを返してやるかということは、もうやはりこういう地道な、こういう環境もあるんですよ、こういう行動するんですよっていう、こういう活動を地道にやっていただいて、初めてまた元の考え方に戻ってくるんじゃないかと思います。そこやとして、どうするこうするというなんてないと思います。まあ、飽食の時代ですから、周囲のことを忘れて、ただその日のほほんと、現在の文明に生きているのが、今日じゃないかと思います。したがって、関係する皆さん方の地道なそういう活動、お願いしたいと

思います。
丸山：どうもありがとうございます。田中三郎さんもちょっと簡単に一つよろしくお願いします。
田中：私は、温故知新という言葉がありますけれども、古文書を読んで温故の方のお手伝いをさせていただいたわけで、知新のこととなりますと、まだそれを物語るほど勉強できておりませんので、何も申し上げられませんが、先ほど松田庄司さんがおっしゃられましたように、生活と密着しなくなった自然、これをどうつぶさないように歯止めをかけるかということになりますと、個人個人の努力だけに頼っていても難しいんではないかと思います。やっぱり政治的判断とか、まあそういったことでもう少し県の施策として、どうしてもということをきちんと打ち出してやっていただかなければ、歯止めがかからないんじゃないかなと思います。土地を離したい人は、離したいと思います、税金は高いですから。そうしますとどんどん押し切り状態になっていってしまうということじゃないかな、と思っています。
丸山：どうもありがとうございました。
本日は非常に長い間みなさん熱心なご討議いただきまして、ありがとうございました。古市さんのご発表の中に、オランダ堰堤の写真が出てきましたが、皆さんご存知のように、デレーケというオランダ技術者が堰堤を作ったという話になっているわけですけども、私が読んだ本によると、デレーケという人はエッシャーという技術者と共に明治6年に淀川を再生するために、それから、そもそも大阪湾を新たに直すために、淀川を調べていって、ついに到達したのが、実はこの瀬田川と大戸川と、そしてこの田上山の地域だったわけですね。デレーケという人は「治水は治山である」という思想を持ったようですが、その当時すでに明治6年頃から田上山の再生事業が、国家の非常に巨大なプロジェクトとして始まったわけでして、そうやって考えてみますと、実はこの田上、瀬田の地域は、大阪、関西の巨大な商業都市と深い関わりがありながら、その明治政府の大規模な政策の中の一大焦点にもなっていたわけで、非常にローカルな場所ではあるんですが、しかしまたグローバルな視点からも見ることのできる地域であり、深い歴史を湛えた場所だと思います。
パネリストの方々にお話しいただきましたように、人間の環境というのは、実は私たち人間だけが生きているわけではないということは確かなんですが、同時に環境は自然環境

ばかりじゃなくて、社会環境でもありますし、家庭環境から自然環境、地球環境まで含めて、私たちが生きているこの世界として、非常に重要な意味を持っていると思います。私たち「里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター」という名前をつけておりますように、里山について考えることは、同時に地域の自然を考えることであり、またそれは地域の人々がどのような暮らしをしてきたのか、そして地域の人々がどのように暮らしていくのかという、そういう繋がりの問題でもあります。今日は、田上の人たちが暮らしてきた地域と、それから瀬田の方々が暮らしてきた地域とが出会うような場所として、この瀬田山があったんだということを、私たち改めて知ることができました。

龍谷大学というのも、この瀬田山の中に新しく入ってきた存在です。田中三郎さんから、以前、「風土」という言葉につい大変含蓄の深いお話をうかがったことがあります。田中さんは、風土というのは「風の人」と「土の人」とによって作るものなのだ、ということをおっしゃったのです。「風の人」というのは他から入って来る人であり、「土の人」というのはそこにずっと土着で暮らしている人です。つまり、そこにずっと暮らしている人と、他から入って来る人たちとが協働し、連携しながら、新たにまた構築していくのが風土であり、そういう意味での環境であるということを、田中三郎さんがおっしゃったことを、いま思い出しました。龍谷大学も、そういう意味で新しい「風の人」となり、この地の風土と文化を形成していく役割を果たせたらと、考えています。

現在、まるで底が抜けたような日本の社会状況なのですが、今後もまたこういう機会を設けて、新しい時代に向けて私たちが、私たちの次の世代、さらにその次の世代のことを考えながら、自然とこの里山の状況と、そして人間の文化と暮らしのことについて、改めて前向きに考えていく、そういうきっかけにしたいと思いますが、本日のこのシンポジウムも、そのきっかけの一つになったのではないかと思います。どうも今日は長い間ありがとうございました。最後にもう一度、パネリストの皆さんに拍手をお願いします。〔拍手〕

【あとがき】

田中三郎さんが、2008年1月11日に急逝されました。心よりご冥福をお祈り致します。